いずみニュースレター

2021 年（令和 3 年）1 月発行　第１8 号

「出会い」

特定非営利法人東村山活き生きまちづくり
理事長　澤　田　泉

・新しい年が出発しました。名実共に心豊かな日々にしたい「出発です」
昨年の新型コロナウイルス感染への不安、重い感染対策優先の日々でした。
それでもなお、容赦なく感染者は減ることなく、収束の兆しが見えないことに「何故、どうして」と不安が募るのみ、全く目に見えない新型コロナウイルス感染対策が大きな日課となり、本来の業務に加え、利用者と職員共々に、のしかかる新たな体験をされてこられたことでしょう。
ご苦労に感謝すると共に、国内外において、感染予防ワクチンの、早期の実用化を目指して研究が進んでいるとの貴重な情報があり、切に寸時暇の無い国際的な事業として念願するものであります。併せて、感染予防対策は、個々一人一人の自重自愛が大前提であります。そのうえで、国家、社会、国民が一体に成ってこの難局を乗り越え今年こそ、きっと実現しましょう、「東京オリンピック・パラリンピック」を。
そして、コロナ感染対策によって、壊れそうに感じる、「人と人の和を」脈々と築いてきた「人と人が慈しみ合う」「日本の文化を」育んでゆきたいと思う。
・「社会福祉法人いずみ」が平成１７年認可式後、それまでのご苦労の一端を報告され、新しい門出を公表・報告を頂いてから、１５年余の年月が経ったのですね。当時、時に立場の違いや、体験的な思惑から対立する意見のやり取りをしたことがおこがましくも懐かしく思い出される。行政に携わってきた一人として、「正論」「当たり前の道筋」を念頭に発言、行動することが行政のあり様であると思っているかたくな行政マンに、屈託なく福祉の現状を承知し、地域社会に根差した福祉の共生を、あるべき福祉の継続性を強く主張した、当時の福岡理事の思慮と、垣間見て来た福祉現場とのギャップを、果たして埋め合わせることが出来るのだろうかと言う疑問、互いに激しい意見開陳があったように思う。肢体不自由児者の様々な環境改善と組織運営の近代化を目指しながら、持続性確保に取り組んでこられた福岡現理事長はじめ関係者の努力と信念に改めて敬服し、現状から未来に橋を架けられた人と人の出会いを今もって嬉しく回顧するところであります。
・最後に自己紹介に代えて、市内に１１０余年の歴史ある「国立療養所多磨全生園」について、「特定非営利活動法人（ＮＰＯ）東村山活き生きまちづくり」の関りと、明日への期待と願いについて触れておきたいと思います。
１９０９年（明治４２年９月）全生病院として創立され、その後「国立らい療養所多磨全生園」と改称され、更にらい予防法の廃止により、現在の「国立療養所多磨全生園」（全生

園）となりました。（以下歴史の詳細は割愛）
現在の全生園の敷地約３６ｈａ（３６万㎡）の広大な敷地になっております。
勿論創設当初一度にこの敷地を取得したものでなく療養者の増加に伴い順次拡張されたものであります。療養者は現在約１３０人ですが、昭和１８年（１９４３年）には１５００人を超える療養者がお住まいでした。
ハンセン病患者と家族に対する間違った偏見・固定観念等が、今なお国民の間に根強い差別の温床となっております。
　ＮＰＯ法人東村山活き生きまちづくりは、「人権の擁護又は平和の推進を図る活動」をテーマの１つとして具体的に「人権の森委員会」を組織し、全生園園内での活動を定期的に実施してきております。「出来る事を、みんなで楽しみながら、汗をかこう」を継続モットー、合言葉に、１０余年経ちました。しかし「人権の擁護」とか「平和の推進を図る」ことは生易しいものではないことを、不断に実感することでもあります。いじめ、虐待、無差別殺傷事件等憂いながら、何故「親が我が子を」と自問する。本来人が人として、持ち備えているはずの、平和とか、人権と言うことを命題にしなければならないのか、そんな青臭いことをふと振り返りながらの活動でもあります。
　全生園の将来構想は、「人権の森」構想です。全生園の長い歴史から学ぶ「人権教育」の場であり、閉ざされた世界で、実生から培ってこられた「安らぎの森」等を次世代に引き継ぐことであると思います。
　このことは、設置当時の東村山村村民が難航した当療養所の設置について深い理解を示したことに応える事であり、この地（園）で生涯を送られた療養者皆さんの貴重な遺産として脈々と後世に引き継がれてゆくのではないだろうか、と思い願っております。
　ＮＰＯ法人東村山活き生きまちづくりメンバーは、園内の花壇づくりや、土を通しての子供たちとの豊かな時間を過ごしながら、「人権の森」構想の実現に向けて活動をして参りたいと思います。

　以上、新年に当たり、脳裏を巡るままに綴ってみました。
社会福祉法人いずみが養い育んできた「歩み」をさらに多くの市民と共に確実な歩みをされることを願いながら。

２０２１年新春

人を騙すということ

社会福祉法人ネット　理事長　伊藤　克夫
（社会福祉法人いずみ　監事）

「もしもし、太郎だけど」と息子とも思えない程のガラガラ声の電話、夜の１１時過ぎの事でした。もう、びっくりして「一体どうしたの」と私。「会社の金を使ってしまい、どうしようも無くなって死のうと思って水に飛び込んだんだけど死ねず、風邪を引き携帯もダメになったので公衆からかけてるんだけど」と震える声。すっかり引きすり込まれたのは十年以上も前の私。その後は明日朝連絡すると言って電話は切れてしまい、携帯もダメになっているのだと、こちらからは掛けられないと、心配がつのるまま朝を待つことに。翌朝の電話で聞いた額のお金を工面して指定場所まで駆け付ける途中の電車で、漸くどうもおかしいと気が付き、ダメになったという携帯に掛けてみたら当の息子が出たのです。「どうしたの、今出張で関西にいるんだけど」と元気な声。ようやく騙されたと気が付いたのでした。私としたことがどうして一晩も騙され続けたか、と悩んで報告した刑事さんの話は、「最初の電話で頭のスイッチが入ってしまうと、なかなか戻せないんですよ」と。これは恥ずかしいけれど私の失敗談、本当の話なのです。

不正な手段で手に入れた他人の家族の名前や卒業した学校などの情報を使って人を騙してお金を奪う、いわゆる「詐欺」は年々巧妙になっているそうです。特に高齢者のお金を奪う最近の詐欺の手口には、第１位が「オレオレ詐欺」、2 位「架空請求詐欺」、3 位が「還付金等詐欺」、そして必要のないものを売りつける「悪質商法」等があって、いわゆる「特殊詐欺」の発生状況は 65 歳以上の高齢者で１年で１万３千件、被害額は３６４億円（平成３０年、警視庁発表）という大金になると言いますから驚くばかりです。

他人を騙すこと、ましてや高齢者を騙すのはとても卑劣なことですが近年、所得格差が拡大しお金に困っている人が多くなってきているとのことで、そうした犯罪が多くなる素地になっているのかもしれません。しかしこうしたあの手、この手を使った騙しで大金を稼ぐ卑劣な行為は許されることではありません。

しかし、いわゆる「騙し」は大昔から世界中の戦（いくさ）や戦争でも使われて来たのですね。

戦国時代、秀吉の「一夜城作戦」や「一の谷の戦」の「鵯越（ヒヨドリ）超え」のように騙しの手口が智略、謀略、計略等という名の謀（ハカリゴト）として作戦の重要な手段だったのです。

コンピュータの世界になった現代は更に変身し、コンピュータを駆使して人を騙す、フェイクニュースを流し大統領選挙の邪魔をする、から始まり、つい最近は他人の姿・行動を撮影した映像の中の顔だけ有名人にすげ変えて、あたかもその有名人がやっているように信じさせるというコンピュータ技術まで現れたとのこと、こうなると何を信じて良いか分からなくなります。

今年も、せめて私たちの身近な世の中そして福祉の世界だけでも、正直な言動で仕事やお付き合い、そして家庭生活等すべての行動ができたらという思いが強くなるばかりです。

ひまわりの療育・目指していく事

ひまわり（児童発達支援事業）

ひまわりは平成 25 年に児童発達支援事業の重症心身障害児通所施設として開所し、今年度で 7 年を迎えました。

ひまわりでは丁寧な療育を大切に考えています。同じ活動でも提示の仕方や補助具等を工夫し、一人一人に合わせ、季節や行事を意識した遊びを日々取り入れています。母子通園の方も多くいるので、親子で楽しみ、成長を感じてもらえる場所でありたいと考えています。

また、年々変化していく児童発達支援事業に求められるニーズに対し、現状で応えていける事はないかと検討を重ね、昨年度より以下の点に取り組んできました。

１．昨年度 4 月より医療的ケア児の単独送迎開始

２．昨年度 12 月より単独保育の受け入れを以下の様に拡大

①単独保育受け入れ年齢引き下げ（年少児以上から 2 歳以上に変更）

②医療的ケア児単独保育受け入れ枠拡大(基本 1 日 1 名から体制が整えば最大 3 名まで)

③夜間のみ呼吸器使用園児の単独受け入れ

３．今年度より個別リハ時間枠の拡大

４．今年度 6 月より入浴支援開始

今後も利用児、家族のニーズに幅広く応えられる様、ご要望に耳を傾け、その都度検討をしていきます。そして親子共に、ひまわりに通って良かったと感じてもらえる事業を目指していきます。

（担当：主任　西島）

あゆみの家幼児部の課題

あゆみの家幼児部（児童発達支援事業）

『子どもと保護者から、あゆみ大好きと思ってもらえる場所』
　この言葉は、児童発達支援事業に移る平成２７年４月よりも前から、あゆみの家幼児部で目指ざし続けているテーマのひとつです。

　現在、あゆみの家幼児部は、０～６歳のお子さんが１３名登録、在籍しています。
幼児部における課題は、①利用率上昇　②柔軟な単独登園数の調整　③幼稚園等の集団移行の準備に特化したプログラムの強化　です。

①利用率
　あゆみの家幼児部の定員は１日１０名です。それに対して１１月末の１日の平均登園数は約 5.3 人です。今後の事業継続に必要とされる登園数は、１日平均６人以上です。利用数の登録者数の増加、低年齢児の利用日数増に向けて、魅力ある活動プログラムの実施に努めていきます。

②単独登園数の調整
　単独登園について、保護者の就労希望だけでなく子どもたちの成長・発達の過程で、親から離れる経験の確保を望む声も多く聞かれます。これまで、職員配置数から一日の単独登園数の上限を固定してきましたが、上限を固定せずに柔軟に対応していくことで、ニーズに応えていきたいと考えています。

③集団移行準備
　現在、あゆみの家幼児部の利用から幼稚園、保育園への移行希望が多くなっている一方、幼稚園、保育園への入園前に子どもの集団を経験させたいという問い合わせを多くいただいています。そのため、半年～１年程度の短期間利用の問い合わせも増えてきています。今後の幼児部の役割のひとつとして、幼稚園や保育園等への橋渡し的、準備機能や待機的機能が挙げられます。集団に入る準備に特化したプログラムを一層強化することで、ニーズに応えていきたいです。

　また、2020 年度２月以降、市内に児童発達支援センターが設置される予定で、地域の事業者間での競争が激化することが予測されます。保護者にとっては利用できる選択肢が増え福祉サービスの向上になるともいえますが、私たちは、上記の課題についての対応だけでなく、魅力ある活動の提供、保護者支援に一層の力を入れながら、何よりも利用者である、子どもたち、保護者のみなさまにとって、あゆみの家幼児部が『大好きな場所』であり続けられるよう、柔軟に考えながら誠実な支援を行っていきます。

（担当：管理者　田中）

ひまわり放課後等デイサービス「スマイル」の課題について

ひまわり（放課後等デイサービス）

①　ひまわり放課後等デイサービス（愛称：「スマイル」で以下記載）とは

「スマイル」は肢体不自由児が多く利用している放課後等デイサービスです。
「スマイル」は 1998 年に発足しその後、野口町でＮＰＯあゆみによる事業運営を経て、2018 年から現在のあゆみの家 2 階に拠点を移しました。今年で発足から 22 年目です。

②　現状について

2019 年度の利用実績数は定員合計 15 名ですが、利用児は年間 9.7 人／日、延べ 2,373 人です。開設当初から比べると大幅に利用者数が増え、活動場所や環境も整備されました。しかし、近年の延べ利用者数は 2,432 人（2018 年度）、2,567 人（2017 年度）と減少傾向です。

発足当時は法制度も未整備だったこともあり、肢体不自由児を対象とする事業所は近隣にはありませんでしたので当法人の「スマイル」利用児も多かったのですが、年月が経ち、現在市内だけでも放課後等デイサービス事業所は８か所、近隣市を含めると数多くの事業所が立ち上がり、それにつれて「スマイル」の利用が減少してきたと思われます。

③　課　題

保護者、利用児の皆様から利用してみたいと思われる事業所、魅力ある事業所を目指し、行事内容の充実、自宅送迎の拡充、今年度は入浴支援の実施など様々な取り組みを行っています。
利用者数の増加が若干ありますが、近隣事業所との競合は年々増しており、新たな発想、工夫が求められています。今後も個々の御子さんの状況に応じ創意工夫を図り、提供する支援の質の向上に努めます。

④　今後について

あゆみの家に既に設置している機械浴槽を利用してニーズの高い入浴支援や送迎システムを充実させて自宅送迎について拡充を目指します。在宅支援の実施に伴いズームの活用、ラインライブ、ユーチューブ配信を始めました。ＩＣＴ（Information and Communication Technology：情報通信技術）の活用を考えたいと思います。

（担当：管理者　梶沼）

あゆみの家成人部の課題と今後

あゆみの家成人部（生活介護事業）

あゆみの家成人部は 12 月現在、定員 24 名に対して 27 名の利用者様が在籍し、23 名の職員が勤務しています。

成人部における課題は①主体性を引き出す支援②幅広い年齢層・障害に対する支援③利用者様の重度化に対する支援です。

①主体性を引き出す支援

成人部として、今後最も力を入れていきたいと考えます。主体性を引き出すためには「コミュニケーション」と「特性の把握」の 2 点が重要です。コミュニケーションについては（１）説明＝なぜそれをするのか？（２）選択肢の提示＝「しない、やらない」という選択肢も含め複数提示（３）意思決定を促す＝発声、表情の変化等で意思を把握する、というプロセスが必要と捉えています。特性の把握については、利用者様の得意とする動きや体の向き、性格等を把握することです。特性を活かすことで、利用者様自身の持っている力を引き出し、様々な場面で受動的ではなく主体的に取り組んでいただきたいと考えます。主体的に取り組むことは大変重要で、意欲や表情が格段に変わります。利用者様のわずかな変化を見逃さず、対応できるように努力していきます。

②幅広い年齢層・障害特性に対する支援

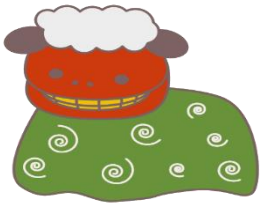
利用者様の年齢層が 18 歳～60 歳と幅広く、障害特性も様々です。同じ活動でも、その利用者様に合っているのか、内容や支援方法を変えたほうが良いのか、分析と検討が必要と考えます。職員一人一人が①のレベルを上げることで、より良い活動・支援につながるものと考えています。

③利用者様の重度化に対する支援

医療的ケアが必要な方が年々増加しています。さらに、加齢に伴う様々な影響が出てくることも予測されます。今まで以上に利用者様に寄り添い、短期的な変化だけでなく、長期的な視点で見ていくことが重要と考えます。利用者様が日々変化していくのと同じく、職員も常に研鑽し、変化していくという姿勢を持ち続けていきたいです。

その他、定員 24 名に対し、現在平均利用率 90％前後ですが、ショートステイ等の利用が再開されたことで変動があります。また、学齢期の方から「利用したい」との声もいただいています。今後も利用者様のニーズに応えつつ、「成人部に通うことが楽しい！」と思っていただけるよう、取り組んでまいります。

（担当：主任　亀井）



ライフサポートつばさの現状と今後の課題

ライフサポートつばさ（生活介護事業）

12 月現在、つばさには定員 30 名に対し 35 名が在籍しています。個々が抱えている障害は様々、10 代から 60 代までと年齢層は幅広く、生活環境も様々。今現在の事、将来の事、抱く夢、抱える悩みや問題も異なり、いろいろな方が集まった小さな社会です。

ライフサポートつばさは授産所時代を経て、平成 22 年 4 月 1 日より、生活介護事業所として新たにスタートしました。それまでの作業中心のプログラムから、レクリエーション、創作活動等、楽しむプログラムが多くなりました。利用者様からのご要望もお聞きしながら、少しずつプログラムの内容も変化しています。

つばさの現状は以下の通り

①利用者層の多様化に対応し、個々にとって有意義な支援の提供を行う。

時間と空間を上手く使いながら、全体プログラム、グループ活動、個別活動、それぞれの充実を更に図ります。

②年齢の変化に応じた働きかけを考える。

元気な利用者様でも、年齢を重ね、ご自身やご家族の心身の変化に伴い、医療やその他のサービスが必要になる方が増えています。つばさの中で、リハビリの時間の充実と共に、運動レクリエーションや生活の中のリハ意識を高め、身体への働きかけを強化します。

また、職員は、福祉制度の知識を増やし、色々な角度から在宅生活を支えていく事が出来るよう取り組みます。

③地域社会との繋がりを深める。

これまで外出活動や行事を通じて地域と関わりを深めてきました。更に、作業等を通じて日常的に役割を持ちながら外へ出かけたり、地域の連絡会、懇談会への参加や協力にも取り組んでいます。

④利用率の向上を図る。

冒頭、35 名在籍としましたが、1 月には 2 名がグループホーム、入所施設へ移行の為、退所。その他の理由で休まれている方もおり、年度当初の予定から収入の減少が見込まれます。利用者支援の充実の為には安定した事業運営が不可欠です。利用率向上、のべ利用者数増に向け、発想の転換と覚悟が求められています。

これらの課題解決に取り組み、利用者の皆様に『つばさ、良いところだよ』という思いで通っていただける事業所を目指して参ります。

（担当：管理者　市川）

ホームヘルプひだまりの課題と今後　－初心忘るべからず－

ホームヘルプひだまり（居宅介護事業）

ホームヘルプひだまりではコロナ禍の中でも、利用者にさしたる御迷惑を掛ける事なく、支援を続けることが出来ています。利用者の生活を支えるためヘルパー一人一人の努力や、長期間の支援で信頼関係が形成された結果だと考えます。しかし、長期にわたる支援の結果、支援自体は行っていてもそこに油断の隙間が出てきています。

マザーテレサの言葉に

「思考に気をつけなさい、それはいつか言葉になるから
言葉に気をつけなさい、それはいつか行動になるから
行動に気をつけなさい、それはいつか習慣になるから
習慣に気をつけなさい、それはいつか性格になるから
性格に気をつけなさい、それはいつか運命になるから」

というものがありました。

この原稿を書きながらこの言葉に出会い、胸をつかれる思いでした。

利用者の信頼の上に安心することなく、初心を忘れずによりよい支援を行っていきたいと思います。また、利用者の高齢化に伴い支援の必要性や多様性が増していく中、なかなかヘルパーの拡充ができません。これは市内の事業所が常に頭を抱えている問題となっています。少ない人員の中でやりくりし何とか支援を行っていますが、ヘルパーも高齢化していく中、なかなかニーズにこたえきることが難しくなってきています。

今後、困難を乗り越え「寄り添う支援」、「ニーズにこたえるために出来ることを探す支援」という 2 点を目指していきます。

（担当：主任　会田）

相談支援事業所トビラ 2020 年を振り返って

相談支援事業所トビラ

現在、トビラの利用者は 100 名前後です。小さいお子さんから介護保険に至る前までの成人の方まで、対象となる方は幅広く、お一人お一人の違いも大きく、ご本人、ご家族の思いをどこまで相談支援専門員として受け止められているかどうか、自信をもって言い切れません。受け止めた相談の中身のほんの一部に対し、受給者証を出してもらうための計画案を作成し、各市への橋渡しをしているに過ぎないのです。真摯に向き合い、いろいろな思いをお聞きしながら、計画作成しているつもりですが、到底十分とは言えません。現状とご本人の未来像を想像しつつ、寄り添っていく姿勢が問われているのだと思います。

本当はご本人を取り巻く支援者、支援機関・事業所を含めての担当者会議を開き、そこで課題を抽出し、より良い支援をしていくための議論をし、実行していく必要がありますが、現在、毎日の業務に追われ、顔を合わせての担当者会議を実施する機会をなかなか作れず、電話での確認がやっとの現状です。

また法人内に 4 人の専門員がおりますが、それぞれに兼務の業務が忙しく、今後、相談支援をしていく上で、専従の専門員を配置できるかどうか、という事も大きな課題です。課題山積み乍ら、これらを背負い、2021 年の新年の山を登って行きます。

（担当：所長　江崎）

硝子戸の向こう

連載企画　第 18 回

本号都合により休みます。その為、業務執行理事 松本恭子が臨時に代わります。

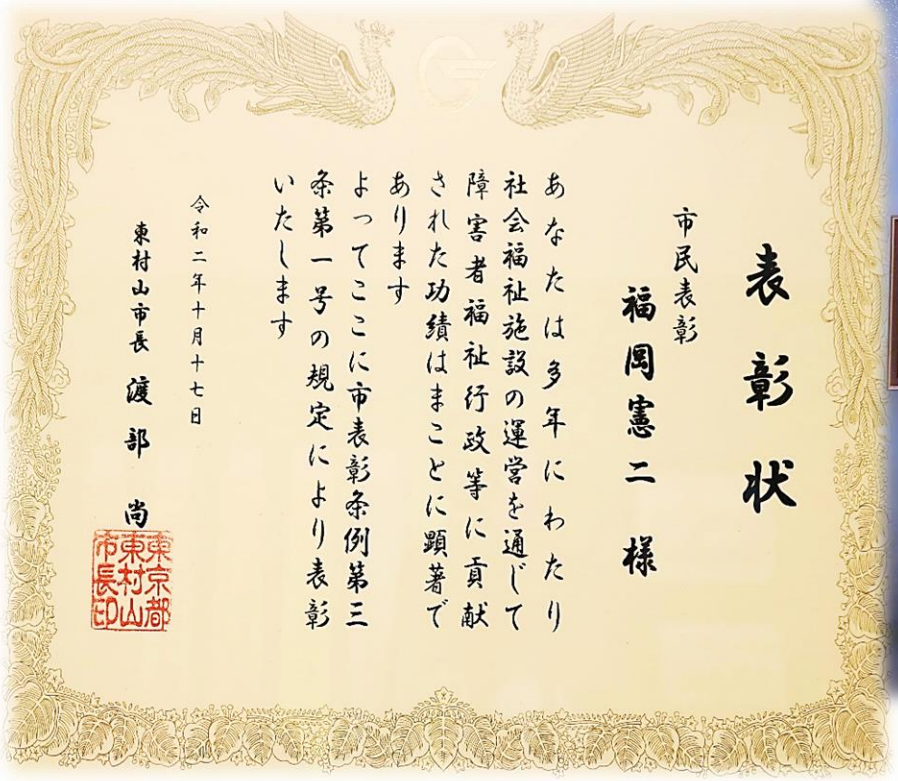
法人いずみ創立 15 年目を振り返って

丁度一年前の「硝子戸の向こう」の中で、福岡理事長は法人いずみ創立当時のことを次のように語っています。

法人いずみは平成 17 年 3 月 18 日に設立され、今年で満 15 年を迎えています。

当時、介護保険制度がスタートして 5 年目で、障害福祉も同様の制度をと叫ばれていました。東村山市が他市の社会福祉法人に委託していた「東村山市あゆみの家」と「東村山身体障害者通所授産所」の運営を市内法人に引き継がせたい意向を持っており、市内の二つの親の会（東村山市あゆみの会とせきれい会）が協調し、最小限の基本金を持ち寄って法人いずみが生まれたこと。その過程は他例にもれず、決して容易なものではなく、障害のわが子や利用者、その家族のためには、何が何でも纏め上げなければならいないという地域の関係者共通の思いが、助役のリーダーシップに支えられ、最後は市長も動くという地域と行政ぐるみの協働で目標期日の僅か 2 週間前というギリギリのタイミングで法人いずみが認可されたということ。そして法人いずみ創立当初の 3 事業が、今や 8 事業所と増え、職員数も当初の 3 倍、100 人規模となったこと。年間予算額も 3 倍となり、事業そのものも、幼児から成人に至る全生涯の障害児者を対象とするという一貫性と、深みのある事業へと成長したこと等です。　　（ニュースレター　第 15 号より抜粋）

こんな事どもを徒然に想起している中、令和 2 年 10 月 17 日、福岡理事長は「東村山市市民功労表彰・社会福祉功労賞」を渡部市長から受賞されました。法人いずみ役職員全員の名誉でもありますので、固辞する理事長を説得し、表彰状と記念写真を皆様のご参考までに御披露します。



表彰状

市民表彰

福岡憲二　様

あなたは多年にわたり社会福祉施設の運営を通じて障害者福祉行政等に貢献されたる功績はまことに顕著であります

よってここに市表彰条例第三条第一号の規定により表彰いたします

令和二年十月十七日

東村山市長　渡部　尚

東京都東村山市長印

助成金を頂きました

○三井住友信託銀行様「障害者愛の福祉基金」より
　リハビリ器具用、練習用階段腰掛（ライフサポートつばさ）

○令和２年度使用　赤い羽根共同募金会地域配分（B 配分）
　音楽遊び等で使用する楽器類（ひまわり）

○真如苑様「多摩地域市民活動公募助成」より
　スヌーズレン器具（ひまわり）

（スヌーズレン器具）

ミラーボール・センソリーブロック

ご寄付を頂きました

○東京善意銀行様経由より
・東京都社会福祉協議会様：高濃度エタノール、非常食セット
・株式会社ガイア様：お菓子詰め合わせ（幼児部、ひまわり）
・スナックミー様:ドライフルーツ（ひまわり）
・株式会社メリーチョコレートカムパニー様：チョコレート（ひまわり）

○山崎製パン様：菓子パン（幼児部、ひまわり）
　　運動会でパン食い競争を楽しみました。

○職員和田さんご家族：ハイバックソファ、
　　衝立、事務机、本棚等

助成、ご寄付により整備された物品は大切に使用させていただいています。
高濃度エタノールは日々の感染予防で使用させていただいています。
ご寄付いただいたお菓子、パンは利用児、保護者の皆様が大変喜ばれていました。
ありがとうございました。

―第７回 いずみコンサート―

令和２年 11 月 28 日（土） 今回はコロナ禍の為規模を縮小して、あゆみの家で開催し、トレ・フォンターネの皆様をお迎えしてライアーのアンサンブルを楽しみました。心地よい響きを満喫し、穏やかな心休まるひと時でした。

演奏予定曲

ケルトの曲（サリーガーデン他）
眠りの曲（トロイメライ他）
お話と音楽「マローンおばさん」（語り　上田道子）

出演者紹介　***トレ・フォンターネ***

2020 年、新型コロナウィルス蔓延による自粛のなか、新しい音楽活動のあり方を見出したいとトレ.フォンターネを結成しました。新しい音楽の泉が湧き出しますようにと。
３名とも東京ライアーアンサンブルのメンバーで、ライアー響会員。

高木美二子（ソプラノライアー）
武蔵野音楽大学ピアノ科卒業。1982 年よりライアーを弾き始め、現在各地でソロ、アンサンブルの演奏活動を続けている。

櫻井由佳子（ソプラノライアー）
1990 年代にライアーに出会う。地元横浜市の教会やカフェでコンサートを行うなど、ライアーの普及に努めている。

皇恭子（アルトライアー）
１９８５年よりライアーを始める。各地でソロ、アンサンブルの演奏会をする他、オィリュトミーとの共演も行っている。

ライアーについて
ライアーのルーツ竪琴は、旧約聖書やギリシャ神話にも登場し、人類最古の楽器と言われています。今回演奏に使うライアーは 20 世紀始め、スイスの障碍者の施設で生まれました。音量は小さいですが、透明で清らかな音色は心を穏やかにしてくれます。

かざみどり　Vol.4

―見学・実習等、お気軽にお問い合わせください―

特別支援学校高等部の方の見学実習や、進路決定に向けた実習の他、「生活介護事業所ってどんなところ？」というような保護者を対象とした見学会等、皆様のご要望に応じた実習や見学会を随時行っています。

また、教員免許を取得する過程で必要な実習や、保育、看護等これからを担う学生さんの実習施設としても実習生を多く受け入れています。

多くの方が見学や実習に来て、それぞれに何かを感じ、今後のことを考えるきっかけ作りだけでなく、今現在利用している方たちにとっても、見学や実習生を受け入れることで、いつもと異なる「社会」を感じることができる貴重な機会です。

これからも多くの方と出会い、次の一歩を共にあゆみ続ける場でありたいと思っています。法人いずみに興味のある皆さん、見学等お待ちしています。お気軽にご連絡、ご相談下さい。　　管理本部：Tel 042-394-1868　（担当　松本）

～編集後記～

今年もよろしくお願い致します。
寒い冬がまだまだ続きますが、体調には気を付け楽しく過ごしていきましょう。
（担当　高野）

発行元：社会福祉法人いずみ
東村山市富士見町 3-3-4
TEL　042-394-1868

※記事内の写真についてはご本人、ご家族の了承を頂いております。